
めいぶる しろっぷ

奈胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めいぶる しろっぺ

【Zマーク】

Z3801E

【作者名】

奈胡

【あらすじ】

幼なじみから始まつた恋。偶然の再会から5年がたつた今、永遠の別れを突きつけられる。2人は一体どうなつてしまふのか……。

プロローグ

『龍ちゃん』あたしが言ひ。

『愛してる』彼が言つ。

このやりとりも、これが最後。

『忘れんなよ、俺のこと』彼がいつものように[冗談交じり]言つと、あたしも微笑んで頷いた。

微笑みが引きつっているのが分かつた。握りしめられていた手も、本当は震えていた。だけど、彼に悲しみを語られるのだけは絶対に嫌だった。

だつてあたしは、幸せだつたんだから。

玄関の厚い扉を開き、外に出た。真夏の湿り気がじんわりと肌を包む。蝉たちの楽しそうな合唱に、あたしの心は突き刺されたように痛んだ。

『忘れられるわけないじゃない……』

苦し紛れに吐いた弱音は、閉まつた扉の向こうにはもう届かない。

いつかはこういう日が来ると分かつっていた。分かつてたはずなのに、どうしてこんなにも辛いんだろう。どうしてこんなにも、彼を求めてしまつんだろう。彼はもう、あたしのものじゃなくなつたのに。

あれからもう、5年も経つんだね。

ねえ、龍ちゃん？

まだ、愛しています。

01* あたしと偶然

「はつ、はつ、はつ……」

小刻みに吐かれる白い息。体が芯から凍つてしまいそうな冬の夜の街を、あたしは地下鉄の駅に向かつて走っていた。

薄手のロングワンピースにニットカーディガンを一枚、という防寒の力ケラもない格好でも、あたしは平氣だつた。それよりなにより、早くケー タイを取りに行かなければならなかつた。人を待たせると、いつのは、やっぱり好きじゃないから。

「その電話、あたしのなんです！」と電話口に向かつて、少しあわてて話しかけたのはついさつき。学校から家に帰るとカバンに入れとおいたはずのケー タイが無くて、さんざん探したあげく電車の中でウトウトしていた自分を思い出した。しかたなく家の電話器から自分のケー タイに電話をかけた、というワケだ。

電話に出たのは若そうな男の人だつた。澄んだテノールの、優しい声の持ち主だ。自分のアルトを少し不安定だと感じているあたしには、その声がとても魅力的だつた。

「助かります！ 捨つていただいて、ありがとうございました」「…………どういたしまして』

声は優しかつたけれど、少しづつきらほつといつか無愛想というか、そういう印象を受けた。

「今すぐ取りに行きますので。どこにいらっしゃいますか？」

『鳴浜駅。なりはま地下鉄の……』

それはあたしが降りた駅だつた。

たしか自販機でコーンスープを買つたときに、販売機横の小さなベンチに荷物を置いたのを覚えてい。たぶんそのときに置き忘れたんだろう。

「分かりました、すぐ行きます。本当にありがとうございました！」

電話なのに、なぜか元氣よく頭を下げた。

『あ、あの……』

その声に気付かずにつと電話を切つてしまつたあたしは、本当にバカだつたと今になつて思つ。

「……どこにいるの？」

何も考えずに自販機の前まで来たあたしだつたが、ここに来てようやく自分のバカさ加減に気がついた。

いない。電話の彼らしき人は見あたらなかつた。

ここで拾うとは限らないのに。あの電話の時、場所を伝えてもらえばよかつた。なのにその前にさつと受話器を置いたのは、このあたしだ。

「もう一度かけようかな……」

でも財布もカバンも持つていない今のあたしには無理だつた。公衆電話を使うにもカードがない。

「あーん、どーしよう」

とうあえず、駅の中を捜し回つてみることにした。

地下鉄 鳴浜駅。そこはもう3年近く通つている駅だつたから知り尽くしていいるのかと思つていたけれど、そうでもないみたいだつた。いつも乗る浅海線の反対側には星城線が通つているのだけれど、ほとんどお世話になることがないので、そっち側は未知の世界だつた。

しかしその中にたつた一箇所だけ、あたしの記憶を痛烈に蘇らせる場所がある。

星城線の改札口の手前、少しだけ広くなつているこのスペースには、少しばかり哀しい思い出が秘められている。

4年前のちよつどこんな寒い日に、彼は引っ越していったのだ。

あれはたしか4年前、ちよつと今日みたいな寒い日だった。隣の家に住んでいた五十嵐 龍といつ高校生が、進学のために下宿先へ引っ越していった。

彼はたぶん、あたしの初恋の人。

幼い頃からずっと、あたしを妹のように可愛がってくれる龍のことを『龍ちゃん』と呼んで慕っていた。

彼に対する『気持ち』は大きくなるばかりで、側にいるだけで幸せだと思えた。

それがある時、それまでに感じたことのないような、訳の分からぬもどかしさに襲われたのをきっかけに、恐くて近づけなくなってしまった。まだその時のあたしには、その感覚が何なのかが解らなかつたから。

そのうち中学生になつたあたしは、めつきり彼に会うことなくなつた。それどころか、自分から彼を避けるようになくなつていた。面と向かつたときのあの『ままずた』といつか 哀しい感覚を、あたしはどうしても好きになれなかつた。

だから彼が引っ越してしまつことも、前日まで知らなかつたのだった。

窓の外のなんとなく慌ただしい様子を不思議に思つて母に訊ねてみると、
「ああ。お隣の龍ちゃん、明日お引っ越しするのよ」と返つてき
た。

目の前が真つ白になつた。頭がグラグラして、倒れるんじゃないかなと思つた。避けるよになつたことを、遅ればせながら後悔した。

「……どこへ？」震える声で訊ねると、

「そこまでは分からぬけれど……」母は玄関に置いてあつたメモ帳を持ち出してきた。

一番上の紙には、電車の路線らしきものと駅の名前が書かれていた。その上を何度もペンがたどついて、誰かに道を説明したような跡がある。

「昨日隣の奥さんには、春ヶ台への行き方を教えたのよ」確かにその紙には、ここから一番近い『鳴浜駅』と『春ヶ台駅』の場所が書かれていた。星城線で少し行ったところにその駅はある。「まったく龍ちゃんつたら、下宿に来られるのを嫌がつて場所を教えてくれないらしくてね」ふふ、と笑つて母は続けた。「だから春ヶ台の辺りなんじやないかしら」

その夜は彼が気になつて眠れなかつた。最後の日くらいはどうしても会いに行きたかつた。でももしかしたら自分が寝ている間に出发してしまうんじやないかとか、本当は春ヶ台の近くなんかじやないんじやないかとか、そんなことばかりが気になつて、長い長い夜はぼーっと天井を眺めている間に過ぎていつた。

彼が家を出ていったのは正午近くだつた。彼は電車で身の回りの細かいものを運び、大きな荷物は彼のお父さんが車で運んでいった。高校の友達らしい人たちが、身の回り品を運ぶのを手伝いに來ていた。

彼が家を出て行く様子を、あたしは自分の部屋から眺めていた。行くべきか行かないべきか。この気持ちは、伝えるべきか封印するべきか。

正しい答えなど解らなかつた。でも最後に一つだけ、ほんの一言だけ彼に伝えておきたい事があつた。

龍ちゃん、ありがとう。

いつもわたしを可愛がってくれた。

「楓、こっちおいで」と、わたしを本当の妹のように抱きしめてくれていた。そんな龍ちゃんはもういなくなってしまったけれど、あたしは本当に幸せだった。

それだけでも伝えたかった。……なのに。

彼は行ってしまった。

あのとき改札口の田の前で、あたしは思い切って彼を呼んだ。

「龍ちゃんっ！」

楽しそうにしゃべっていた彼やその友達が、いっせいにこちらを振り向く。

「誰だよ、あれ」

「おまえの妹？」

一瞬静まった集団が、また少しづわづわ。

大きく息を吸って、「龍ちゃん、あ」りがとひ、と言おうとした

そのとき

「さあ？ 知らねえ。人違いじやねえの」

彼はあたしと目も合わせずに、くるりと後ろを向いて去っていった。

彼らが行つてしまつてからも、あたしは茫然とその場に立ちつくしていた。

「知らねえ」その言葉はあたしの心を粉々に引き裂いて、そして消えた。

03 * 僕と偶然

コツ、コツ、コツ……

ハイヒールの音が軽快に響く。

カツカツカツカツ……

早足で通り過ぎていく人がいる。

人の行き交うこの駅で、いろんなペースの足音を聞く。

静かにベンチに座る僕はコーヒーをすると、目を閉じてゆっくりゆっくり味わった。

仕事帰りの一杯は、僕のささやかな習慣だ。まあ、一杯といったって自販機のコーヒー。笑えるくらいリーズナブルで、財布のヒモも麻痺してしまうけど。

あまり人影のない休憩室の隅で、今日も早速ボタンを押す。ヴァンというファンの音と同時にガシャンと缶が落とされた。

この駅の、このコーヒー。缶コーヒーにも、少しばかりこだわりがあった。この味は他の商品では味わえない。さらにはこの品を置いた自販機は、ここ鳴浜駅にしか存在しない。

という訳で僕は毎日、この駅でこのコーヒーを飲んで帰るのだ。

この鳴浜駅は、僕が昔住んでいた家に近い。今ではここから8駅離れた春ヶ台駅の近くで一人暮らしをしているが、以前はこの近くで家族と暮らしていた。幼い頃によく利用していたので、思い出もいくつもある。

小学生の頃、家出して電車に乗つたら帰り道が分からなくなつて、泣きながら家に電話したのはこの駅だった。中学の頃、初めてできた彼女に振られたのもこの駅だ。高校生になって、学校へ行く途中に財布を落としていったこともあった。

……どれも決していい思い出ではないが。まあ、良くも悪くも、思い出は思い出。今となれば全てが笑い話なのである。

だけ……。ただ一つだけ、割り切れない思い出もあった。

高校三年生の冬、僕はこの場所で、大好きな人を傷つけた。本当は、彼女を忘れるためにしたことだった。だけど傷つけてしまったことへのショックはあまりに大きすぎて、その思い出はずっと心に残ってしまった。彼女への想いとショックを、僕は癒すことも切り捨てることもできずに、ただ傷として自分の中に抱えて生きてきたのだった。

そんな僕もいつしか大学を出て社会人になつて。そしてここは会社からの帰り道に立ち寄れる駅になつた。

いつもの駅の、いつものベンチ。

自販機の横には小さなベンチがある。そこが僕の定位置だった。と、ここまでは何もかもが普段通りだったのだが、ベンチに腰掛けようとかがんだその時、何か見慣れないモノが目の前をよぎった。

「ん？」

白いボディーに控えめな飾りつけのそれは、女性の携帯電話だと思う。まったく、こんな所に落としていくなんて個人情報の流出もいいところだ。

僕はそいつを手に取ると、コーヒーをぐいっと一気に飲み干して改札横の窓口まで向かつた。いくらなんでも放つておくほどの薄情者ではないつもりである。

「あいにく、駅員の姿は見えなかつた。
「つたく、しようがねえなあ」

僕は窓口とケータイを交互に見やつた。

「……持ち主さん、失礼します」

僕はなぜか電話に一礼したあと、仕方なくそいつを開き、とりあえずプロフィールページを検索してみた。自宅か職場に連絡してやれば安心するだろう。センターキーを押すと、メニューからプロフィールが立ち上がつた。

するとそこには

「……嘘だろ」「

一番に目についた持ち主の名前を見て、僕は凍りついた。一瞬、もと落ちていた場所に戻そうかとすら思った。
まさかの展開。

持ち主の彼女は、あの日傷つけた大好きな人だった。

【相原 楓：アイハラ カエテ】

間違いない、あの『楓』だ。小学生の頃、妹のように可愛がっていたあいつなんだ。

僕はケータイから目が離せないまま、少しの間棒立ちになっていた。届けることはできない。逢つてしまったら今度こそ僕は何をしてしまうか分からぬから。

今までずっと心に秘めてきた想いだって、今さら彼女に届くはずもない。惨めになるだけだ。

そんな凍てついた僕の手の中のケータイは、まもなく鳴った。

『その電話、あたしのなんです！』

電話口から聞こえるあわてた、でも綺麗に澄んだ声に、人違いであることを祈る。幼い日のあの『楓』が、ここまで娘になることは僕には考えられない。

『助かります！ 拾っていただいて、ありがとうございました』

『……どういたしまして』

僕が僕だと気づかれないように慎重に話したために、応対が少し無愛想になってしまった。口数を減らし、なるべく口を開かないようにする。

僕はこいつと違つて成長期でも何でもないし、声で分かつてしまうだろうから。僕だと分かったら、彼女も取りに来にくくに決まっている。

『すぐにうかがいます。本当にありがとうございました！』

電話口の向こうの彼女は嬉しそうに礼を言つて、さつさと電話を切つてしまつた。

「あ、あの……」

俺のこと、覚えていてくれますか？ 最後に一言だけ、そつ
聞いておきたかったかったけど。

過去は過去。楓に逢ってはいけない。今の彼女の邪魔をしてはい
けない。僕はそう思う。

いや、自分にそつ言い聞かせた。

「忘れるんだ」 今日のことも、あの日のことも。

僕は再び歩き出した。

04 * 過去の俺と 愛しい人

来ない。楓が来ない。

あの家からこの駅までなんて、そう遠くはないのに。
間違つても、時計の針が真反対まで動くほどの時間はかかるないはずだ。

それなので。

まつたく、世話が焼けるのは昔から変わらない。

手持ちぶさたになつた僕は、なんとなくあの改札口へと向かつた。
あの日 最後に見た彼女の顔は、見たこともないほど純粹で美しかった。傷つき歪んだその顔は、僕の中から抹消できないほど綺麗で、
その綺麗さが余計に僕を苦しめた。

その瞳から涙が溢れる前に、僕は消えなくてはならないと思つた。
一度と元には戻せない、大切なものを失つたのだと感じた。

あれから僕は、特別な女をつくることができない。

未練なのか、それとも後悔の類なのか、どちらにしろ僕にとって、
恋愛は恐ろしいものと化した。

僕でさえこの有様なのだから、彼女にはこれ以上のトラウマをつくつてしまつたに違ひない。あるいは、幼すぎて覚えていないだろうか。

もう一度、あの頃に戻つてやり直したい。そうしたら、今度こそきちんと伝えてやるのに……。

自動改札機の手前に立つと、あの日の記憶が驚くほど鮮明に蘇つた。

そう、ちょうどこの辺りで、愛しい人の声を聞いた。ほとんど顔を合わせなくなつていたから、呼ばれただけでも胸が締め付けられる

ほどに愛しかった。

でも、これからは「本当に」会えなくなるところを考へると、彼女のことは忘れるしかないと思うのだった。いつまでも引きずつているわけにはいかない。僕の中から消してしまったことを、そう思つたのだった。

『龍ちゃんっ！』

あの口、彼女にそう呼ばれて おもむろに振り返つた僕。でも今はもう振り返れない。脳裏に焼き付いたままの悲痛な顔が、また蘇つてしまいそうだから。

「龍ちゃん……？」

そり、たとえ誰かに呼ばれようとも。

振り返つてはいけない。でも、もう一度あの場面からやり直したい。もう一度振り返つて……！

ケータイを握りしめたまま、おそるおそる振り返つたその先には、「龍ちゃんなの……っ？」
彼女がいた。あの口とは全く正反対の、今度は驚いた顔をして。僕も僕で立派に驚いた。まさか本当に、そこに現れるとは思わなかつたから。

一瞬、幻覚かと思つて目をそらした。だけど彼女から注がれてくる熱い視線に、僕の目は再び吸い寄せられるように彼女を捉えた。「楓……っ、本当に楓なのか？」

瞳に張つた透明な幕を隠すように、彼女は困つたように笑つてゆつくつとうなずいた。笑つた顔なんて、もう一度見ることはできないと思つていたのに。

「遅くなつてごめんなさい。居場所が分からなくて、ずいぶん探しちやつた

舌を出して笑う彼女は、やつぱり僕の好きな楓だ。

「ごめん。会う場所 決めればよかつたな」

久しぶりに見る彼女が眩しくて、真っ直ぐ見てやることができない。

「いいの。言ってくれる前に切ったあたしが悪いんだから

「え？」

「ほら あのとき、言つてくれようとしたんでしょ？　『あ、あの

……』って」

「いや、あれはその……」

とにかく、君に会えてよかったです。

05* 過去のあたしと 大好きな人

駅の中を、あたしはほとんど彷徨うように歩いていた。

出口付近で待つているかと思って行ってみたけれど、どの出口にも彼らしき人は見当たらなかつた。

自販機の前にも誰もいない。浅海線の改札口にもいない。そういうと残るは

「行きたくないよ」

心の中だけでは足りなかつたようで、つい口に出してしまった。

それでもやつぱりあたしは、人を待たせるのは好きじゃないみたい。

自分の意志とは裏腹に、足は星城線の方向へと進んでいた。

少し歩くと、懐かしい光景が広がつた。

あれから一度も訪れなかつた場所。だけど4年前と何も変わっていな

い。と、そのとき、ふと人影を見た。黒のスーツ姿には明らかに似合

わない、真っ白なケータイを持って、彼は立つていて。

あたしには背中が向けられていて、顔は見えないけれど、ただ一点

だけを見つめているようじつとしている。

「あの、それ……」

話しかけようとしたけれど、突然感じた不思議な何かに、あたしの身体は固まつた。

切ないような、温かいような、苦しいような、嬉しいような……。

何だか懐かしいこの感じ。

温かくて大きな背中。そう、よくあたしをおんぶしてくれた。

それは

「龍ちゃん……？」

ゆっくりゆっくり、その人は振り返った。

「嘘うそなんの……う？」

彼の顔を確認する前に
視界が滲んでしまって、人違ひだつた
らと一瞬焦つた。

だけど、

楓……つ、本当に楓なのか？」

その声は大好きな龍ちゃんに違ひなかつた。

ケータイを拾つてもらつただけで泣いてしまつよくな変なヤツだ
と思つたくないから、頑張つて涙をうつらせる。

それでも上手くいかなくて、しょうがないから舌を出して笑つてみせた。

「ちやつた」

「ごめん。会う場所 決めればよかつたな」

何よりもあたしを最優先に考えてくれる龍ちゃんが好き
変わつてないみたいで、そんな一ヒダナでも嬉しい！

ただ会えただけ。それだけなのに……。

こんな些細なことだけで泣いたりあたしは、もしかしたら本当に愛なフソばつがらいはー。

「いいの。言ってくれる前に切ったあたしが悪いんだから」

受話器を置く前に一瞬だけ、『あ、あの……』って聞こえた気がし

だから悪いのは龍ちゃんじゃないんだよ。

「せりあのとが、言つてくれねえとしたんでしょ？」あ、あの

「一や、あへまそ」

もううん、彼があのとき本当は何を詮がうとしたかをちゃんと
と知れることができたのは、もう少し先のこと。

「…………くしゅん」

彼女が小さなくしゃみをしたといひで、僕は重大なことこ気がついた。

「お前！ 寒いだろ、その格好」

このくそ寒い空の下を、楓はこんな薄着で走ってきたのか。

「う、うん……。まあね」

えへへ、と笑つてみせる彼女の無邪氣さが、愛しさとなつて僕の胸を締めつける。

「まあね、じゃねえよ。風邪ひくぞ」

僕はジャケットを脱いで彼女にかぶせてやつた。

「あっ、ダメだよ。龍ちゃんが寒く……」

すっぽりと収まつてしまつ彼女に、愛しさが増す。

「俺はいいから」 そういうと僕は、「暖かいところ、行こつか」

彼女の手を引き、繁華街へ続く出口の方へと向かった。

こうして手を繋ぐのは、何年ぶりだろうか。

今の僕にとっては、『楓と手を繋ぐ』のは結構重大なことだが、彼女からしてみれば やはり僕はいつもの『幼なじみの龍ちゃん』なんだ。

あの日、彼女は最後に何を言いに来たのかは分からぬが、あの頃もう既に彼女が僕を避けるようになつっていたのは事実である。僕のような気持ちが 楓にもあるなんてことは、まずありえない。

その証拠に、彼女の方もこうして平気で手を繋いでいられるのだ。僕が今、あの頃と同じ……いや、少しほとんど大人になつたはずの気持

ちで、楓の手を握っていると知つたら、彼女はびくするだらうか。それとも……
僕の手を振り払つて逃げるだらうか。それとも……

「「めん……っ」

突然、楓が手を離した。

僕の気持ちを見破つたのだと、瞬時に悟つた。

「ああ。分かつてゐよ」

覚悟はできているはずだ。元はといえば、こいつの事は忘れるつもりだつたわけだし。
でもこれじゃ……。

ところが意外なことに、彼女がほどいた指先は、何やら腹の辺りで作業をしたあと、再び僕の手のひらに戻つてきた。あまりに予想外で、状況を読むまでに時間がかかるつてしまつ。そんな、手から力の抜けたままの僕を安心させてくれるかのように、彼女は笑つて言った。

「寒かつたから……前、閉めたの」

「あ……そ、そうだよな！ 寒いもんな」

一人で勝手に振り回された自分に失笑しつつ、再び歩き出す。

目の前に迫つた外への階段を登つていくると、上からの風が直接吹き抜けて、確かに寒い。

「で、何が？」 並んで歩く彼女が言つた。
「は？」

あまりに唐突すぎて、何が何だか分かつたもんじやない。驚いたので思いのほか強い口調で聞き返してしまつた氣がして、少し慌てる。
「さつき言つたじやない？ 『分かつてゐ』って。あれ、何のことかなーと思つて」

彼女はそんなことは全く気にしていないうつだつた。といつかそれより俺、ヤバいところを突かれている。

「あ、いや別に。 あつほら、後でゆっくり話すからさ」 そ

う誤魔化して、とつあえず先を急ぐフリをしてみた。

「とにかく行こうぜ」

斜め後ろを歩く彼女は、僕の手を柔らかく握ったまま何も言わない。寒いからなのかもしれないが、4年のブランクのせいで妙な空気が流れているようで歯がゆい。

この位置からでは楓を見る事とはできないが、こいつしているだけでも彼女の変化は自然と伝わってくる。

僕の覚えている限りでは、こいつの手はこんなに大きくなかった。もつと小さくて丸っこくて、いかにも子供という感じの手だった。もつとも手なんか繁ぐことができたのは、楓が小学生の頃までだったけど。

彼女の成長が切なく感じられる。僕を置いて、楓はどんどん大人になっていく。あの日の思い出の中に僕を閉じこめたまま、楓はどこか遠くへ行ってしまうんだろう。

過去にこだわるのは嫌いだが、彼女に関してはそつとは言い切れない。彼女との思い出は綺麗すぎて、最後のあの瞬間だけが逆に際立ってしまう。彼女だけは、どうしても記憶から消せない。皮肉なことに、忘れようと思つ度に思いつ出してしまつてるのは事実なのだ。

俺は男としてどうするべきか。

彼女の幸せを優先して、この気持ちを隠し通そつか。それとも、いつもソプライドなんか放り捨てて全てをぶつけてしまおうか。

どうしてこんな事をいつまでも考えてしまうんだろう。

駆け引きなんて、女らしいことはしたくない。思つたことはその場でストレートに伝えたい。これまでだって、ずっとそうしてきた……はずなのに。こいつのことが絡むと突然、自分が正反対の内気

な男になるのだ。

楓といふると、まるで調子が狂つ。こんなふうに歎むなんて、俺らしきの欠片もない。

もどかしかつたら戻えればいい。……そう。分かつてはいるけど。

言葉にしたら、きっと何かが壊れる。僕たちの関係も、思い出も、もちろんこの空氣も、何もかも。

伝えられないから、余計にもどかしい。

息が詰まつそうに苦しきのは、氣まずい空氣が流れるからなんかじゃない。

07 * あたしと 幸せの音

いつもあたしを最優先に考えてくれて、妹みたいに可愛がってくれる。

それでも少し強引で、乱暴な言葉遣いが他人に誤解を与えたりする。でもそんなギャップがあたしのツボだつたり。

今もまたほら、勝手にあたしの手を引いて、出口の方へ歩いてくる。でもこれも彼の優しさ。薄着のあたしを見て、「風邪ひくぞ」って暖かい場所を探してくれて。それに何となく、歩幅も合わせてくれてるみたい。

あたしには龍ちゃんが側にいてくれるだけで、十分暖かくて幸せなのに。

そんな彼を、あの頃どうして避けるようになっちゃったんだろ。
……もつたいないことしたなあ、なんて思つたり。

心臓が、音を立てて鳴つてしまつ。

斜め前を歩く彼は、そんなあたしの手を優しく引くだけで、何も言わない。まるであたしの心臓の音を聞いてるみたいに。

絶対に聞かれたくないのに。こんなこと、絶対に気づかれたくないのに。

そう思えば思つぽじに、あたしの心臓は 今にも飛び出しそうなほどに激しく鳴つてしまつ。

そんな自分を落ち着かせるために、冷静に物事を考えてみた。

龍ちゃんと手を繋いで歩くなんて、何年ぶりかな。

まさかこんな風に、また手を繋げる日が来るなんて、思つてもいいなかつた。

嬉しいよつな、恥ずかしいよつな。

彼はどんな気持ちで繋いでくれていいのかな。……まさかね、あたしじゃないんだから。

無理なことを考えるのって、すごく悲しい。

彼はそんなものにこだわつたりしない。

今の彼の『手を繋ぐ』と、あたしの『手を繋ぐ』は、きっと天と地ほどに違つて……。

風の吹き抜ける階段に近づくにつれて寒くなつてきて、前ボタンを閉めたくなつてくる。

彼の貸してくれたジャケット。大好きな彼の香りがする。せつかく繋いでるのもつたいけど、片手じゃボタンは閉められないから手を離すしかないみたい。でも一度離しちゃつたら、どうしたらいいんだ。もう一度繋いでなんて、あたしには言えないよ……。

「「めん……っ」

ああ、離しちやつた。

すると、

「ああ。分かつてるよ」

彼は寒がるあたしに気付いてくれていたようで、スッと手をまといてくれた。

やっぱり龍ちゃんは優しい。

だけど。

今のはそんな単純な言葉じゃなかつたみたい。

彼の顔が妙に寂しそうに見えたのは、氣のせいなんかじゃないと思ふから。

ボタンを閉めるとあたしの指は、自分でもびっくりするほど素直に、彼の手のひらに戻つていった。

ちょっと大胆なことをやつてのけた自分と、少しもあたしを拒まない彼に動搖しながら、じまかすように言つ。

「寒かつたから……前、閉めたの

「あ……そ、そだよな！ 寒いもんな」

悪戯に笑う彼の姿があたしの心を驚撫みにする。

あたしが……彼の寂しさを、分かつてあげたい。

「『分かつて』って。あれ、何のことかなーと思つて」
だつて、放つておけない顔してた。

オレンジ色が柔らかく零れる窓の前で、彼の足は止まつた。

「ここでいいか？」

こんな風にあたしに聞いてくれるなんて、珍しいかもしない。
「うん。ありがと」 でも本当は、龍ちゃんが決めてくれたところ
なら、どこだつて嬉しい。

ガラス越しに可愛らしいティーカップが見える。あたしの大好きな物たちを、いっぱい集めたような雰囲気のそれは、カフェだつた。
「お前、こういうの好きだろ」 彼が窓辺を指さして言つ。彼も同じティーカップを指していた。

「うん、大好き！」 そう言つと、彼は懐かしそうに笑つた。
「やっぱりな。変わつてない」

チリン チリン

彼が扉を押し開けると、明るい鈴の音が響いた。暖かい空氣とともに店内を流れるオルゴールの澄んだ音色が、すっかり冷たくなつてしまつたあたしたちを優しく包んでくれる。

「いらっしゃいませ。お一人様ですね」

カントリー調のエプロンをした店員さんが、笑顔で迎えてくれた。

「いらっしゃいづわ」

空いている時間帯のようで、店内には若いカップルと小さな子供を連れた親子の姿が見受けられるだけだつた。

案内されたのは窓際の席。ガラスに向かう形の席で、他のカフェ

ではあまり見ない不思議な配置に、嬉しさが増した。

龍ちゃんの隣に、あたしが座る。

繁いでいた手と手が自然にほどけ。飛び跳ねていた心臓が、少し落ち着くのが分かった。

あたしの中で鳴る曲を、オルゴールのBGMがかき消してくれている気がする。

いつもよつよつとスピードを上げて、それでも定期的に鳴つてい る。

幸せは……、鳴るんだね。

08* あたしの願いが叶うとき

華奢な木彫りの椅子にかけると、龍ちゃんがのぞき込むよつこじてあたしを見た。

「なに……？」

「んー」何ともとれないような返事をして、彼は続けた。「変わったような、変わつてないような……だな」

「よく分かんないよ」あたしは笑つて返す。

「俺も分かんねえ」彼も笑つていた。

頼んだコーヒーとミルクティが来るまで、あたしたちはいろんな事を話した。

小さい頃を思い出したり、学校の話をしたり。龍ちゃんは、大学や会社のことたくさん話してくれる。田を細めて楽しそうに話す時の彼は、昔と変わらない無邪気な『龍ちゃん』だった。

変わつたような、変わつてないような。

なんとなく分かるような気がする。

だつて実際、久しぶりに見た龍ちゃんは以前とだいぶ変わつてた。髪は明るいブラウンから落ち着いた色に染め直されて、いつも大きなピアスが存在を主張していた耳には、ずいぶん華奢なクロスだけが光つている。たまに見かけた制服姿も今では端正なスーツ姿に変わつて、彼はいつのまにか一緒にいるのが恥ずかしいくらいに魅力的な『大人の男』になってしまった。

彼の隣にあたしがいるなんて、まるで間違つてるんじゃないかな。少なくとも、こんなにお子ちゃまで平凡なあたしと、誰もが振り返るような彼とじや、あまりにも不釣り合いだろうし。

そしてそんな『振り返る女』の中に、彼にふさわしい大人の女性は存在するのだ。

なんだか自分に自信が持てなくなつてしまつ。

いつたい今までに何人の女性が、そんなふうに龍ちゃんを独り占

めしてきたんだろ？。こんなあたじじや、お話にもならない、ね。

「下宿も自由で楽しかったんだぜ。大家のオバチャンはいつもさかってけどな」

彼が悪戯っぽく笑う。

「寂しくなかつたの？」

できるだけ冷静を装つていた。ところがさうな心を見透かされるわけにいかない。

「当つたり前だろ」

あたしのおでこをパンツとはじいて、口吻をにらみつけている。

「あー、口が笑つてゐるー ウソつきッ！」「

「バカ」

他愛もない会話だけど、あたしにはそれだけで十分だつた。

「なーんだ。龍ちゃんが引っ越すとき、あたしはすぐ寂しかったのにさつ」

何気なくそう言つてしまつて、はつと口をつけぐんだ。

お互ひ『あの日のこと』には触れないようついで氣を遣つて話していたのに。

彼との間に、妙な空気が流れ出す。行き場を失つてしまつた気持ちが、あたしの眼球だけをどうしようもなく泳がせていた。

「お待たせいたしました」

なんとも素晴らしいタイミングでドリンクがやつて来る。

「中身 熱いですでの、お氣を付けください」

柔らかく優しい声で、店員さんは言つた。

「ありがとうございます」

あたしがそう言つと、微笑み返してくれた。

まつりと窓の外を眺めていたら、口が半開きになつているのに気がづいて慌てて閉じた。

今の、見られちゃつたかな……。

さりげなく隣を確認すると、なんだか真剣な目で遠くを見つめる彼がいた。

「……。」

黙つたまま、何も言わない。

余計に落ち着かない気持ちがくすぐついた。田のやり場に困ついたら、ガラスに映つた彼と視線がぶつかってドキッとした。

なに考へてるの？

なんて聞くほど、おせっかいで空氣の読めない女じゃない。あたしも静かに外でも見ていようかな……。

ふと、リラックスモードに入りしちゃうとしたあたしの耳に、龍ちゃんの声が響いた。

「俺さ……、」

遠くの方を見つめたまま、まるで今思いついたことのよひに淡々と言つ。

「俺さ、お前のこと好きだわ」

ドクンッと心臓が跳ねる。ガラスの中の彼を、上手づかいにおそるおそる見やつた。

「うそお……でしょ……？」

でも。

少なくとも、窓ガラスに注がれる彼の真剣な目を見る限り、それは嘘なんかじゃないのだつた。

「ねえ、本気で……言つてる？」

「冗談だよ、なんて、笑わないよね。

「今日お前に会つて、確信した。死ぬほど本気だつて

「……！」

何か言わなきや。早く伝えなきや。

気持ちだけが焦つて、言葉にならない。「夢じや……、ないよね

「え？」

あたしつてば、なに弱気になつてゐる。

龍ちゃんのこんなに真剣な顔見たの、初めてなのに。こんなに真剣

に伝えてくれたの！」。

「あたしも……」

言わなきや。

「あたしもずっと……」

伝えてなきや。

だけど。

「やめや」

静かに、でも低く痛みを利かせ、遙るよつに彼は言った。

「本当の事を言え」

握りしめられた彼の手が、テーブルの陰で震えてる。

「ほんとだよ」

ただの優しさなんかじゃない。これは本心だよ。

あたしは、心からあなたに惹かれてた。

「龍ちやんこそ。もし嘘だつたら、あたし……泣こむからね……！」

そう言いつつも、もつすでにあたしの視界は霞み始めてるみたいだつた。

「バ…ッ、バカ！ 泣くなよ」

ちよつと驚いて、でもなんだか幸せそつ、彼があたしの頭をくしゅくしゅっと撫でる。

ねえ、あたしも幸せそういうに見える？

幸せは、鳴る。ほら今だつて、あたしの胸は今こもせまうされやつなくらい音を立ててる。

ねえ、龍ちやんの幸せも、鳴つてる？

答えを期待した訳じゃない。

それに、伝えたいというよりは、ただ自分自身にナジメをつけたい
というだけの事だった。

いつも思い出だけを見てきた。僕の中でこいつだけが、『女』と
呼べる存在だった。

でも今日やっと分かつたのだ。

楓は変わった。僕の思い出の中の彼女とは比べ物にならないほど
に。声も仕草も愛らしい瞳も、なにもかもが美しく成長していた。
そんな彼女を邪魔する権利など僕はない。ここは男らしく引き下
がるのが筋だ。

だけど最後に一度だけ、彼女に伝えておきたくて、ビラじょうも
ない自己満足に、彼女を巻き込んでしまったという訳だ。

緊張してゐるカツコ悪い僕を悟られないために、できるだけ淡々と
述べた。

正直、与える印象なんて、もうどうでも良かつた。何も突っ込みま
ずに、聞き流してほしい気分だった。

「へえ、そうなの」って、負けないくらい淡々と答えてくれても良
かつたのに。

「本当の事を言え」

「ほんとだよ」

優しい彼女は、きっと誰にでも気を遣うんだろう。

「龍ちゃんこそ。もし嘘だったら、あたし……泣いちゃうからね……
！」

うつすら膜の張つた瞳を誤魔化しながら、頬を真紅に染めて僕を見
上げる彼女は、僕だけが知つてゐる楓だ。

「つたく、かわいい奴」

そう笑つて頭をくしゃくしゃにしてやると、幸せそうに楓も笑つた。

「最高だ」

彼女の前髪をかき上げ、額にそっと口づけた。綿のよう柔らかな肌の感触が伝わる。

大きく見開いた瞳だけで僕を見上げる彼女を、壊してしまいたい衝動に駆られる。

でも、今はまだダメだ。

もう一度だけ彼女の柔らかい肌を唇で確認すると、僕たちはまた窓の外の世界に目を向けた。

「もうすぐクリスマスだね」「

幻想的に街頭や街路樹を彩るイルミネーションに、楓が田を細める。「今年こそ、雪が降つたらいいな」

彼女はホワイトクリスマスを想像しているかのよつて、柔らかい瞳でぼんやりと外を見やつていた。

「外、行くか？」

僕は飲み終わったコーヒーのグラスを、確認するよつに少し傾けながら訊いた。

「じゃあ、もう少し待つて。今、飲み終わるから」

彼女は嬉しそうに僕に笑いかけると、少し慌てながら残りのミルクティーを飲み干した。

「おいしかったあ」

満足そうにそう言つて立ち上がるつとする彼女の口元に、ミルクティーが少し残つている。

「ちょっと待つて」

僕は彼女の腕をできるだけ優しく引っ張つて抱き寄せた。僕が顔を近づけると、彼女はとっさに目をつぶつた。

「ここ……付いてるぞ」

指で拭つてやるつもりだったが、本能は理性を無視し、気付くと唇が彼女の頬に触れていた。

惜しいところまで行つたので、彼女もさすがに瞳をぱちくりとぱしき

く動かしている。

まだダメだ。あともう少し待つていろ。俺はせめてクリスマスまで……取つておきたいんだ。

結構大胆な行動も、実は得意なのかもしない。

外の凍えるような寒さは、いつこうに和らぐ気配がなかつた。
こんな気温では、寄り添つていなければ死んでしまいそうだ。夜の
街に散りばめられたイルミネーションを一人で眺めながら、大きな
噴水の縁に腰かけた。

「星は……見えないね」

残念そうに楓が呟く。都会の真ん中の公園には、星の光は届いてく
れていなかつた。

「いつか、満点の星空が見てみたいな

「そうだな……」

楓と二人で満天の星空を眺められたら、どんなに幸せなんだろう。
二人で夜の草原に寝転んで、一晩中 眠りもせずに。

「行こう、草原に」

突然 彼女の手を握り、草原なんて言い出した僕はおかしな奴だつ
ただろう。

くすくす笑いながら、彼女は訊いてきた。「星を見に行くの？」

「ああ。俺の金が貯まつたら、一人で見に行くんだ」

彼女は嬉しそうに微笑んだ。本気してくれたかどうかは分からな
い。でも必ず彼女を連れて行くんだ。

「そんなにお金がないの？」

「……」

彼女が微笑したのは、喜んだからではなかつたのかもしれない。

「約束だよ」

運転席の窓を開けると、楓が小指をさし出してきた。

「ほら、ゆびきり」

少し面倒くさそうに自分の小指を絡ませると、彼女の小指は微かに温かかった。

冷え切つた楓を、僕は家まで送り届けてやつた。公園から僕の家までは近かつたから、そこから車を出して彼女を家に送つた。
懐かしい街だ。引っ越ししてから、まだ4年しか経っていないのに。
そのせいか、街は以前と全く変わっていなかつた。相変わらず、楓の家の窓からは暖かな光が零れていて。相変わらず、楓の家の隣には僕の家があつて。

楓が見えなくなつてしまつてから、僕はひさしひさに実家に寄つていこうと思いついた。

父さんと母さんの顔をしばらく見ていない。これから年末年始で忙しくなる時期だし、なかなか顔を出せなくなるだろ?。と言つてもまあ、正月には帰つてくるのか……。

そんなことをじちやじちや考えながら、とにかく僕は車を止め、久しぶりに実家の門をくぐつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801e/>

めいぶる しろっぷ

2010年12月16日02時04分発行